



殻を破り次の世界へ

校長室便り

R5年度 No.13

11月29日発行

11月



“できない”とあきらめていませんか！！



昨年8月の「校長室便り」では、「鎖（くさり）につながれた象（ゾウ）」という話をもとに記事を書きました。最近、生徒の皆さんから、頑張ってみないで「できない」「わからない」という声をきくことがあります。すぐにあきらめてしまう言動が目につくことがあります。そこで、再度、この話をしたいと思います。この話は次のような内容です。主人公がサーカスを見に行き、大好きな象を見ていて疑問を抱きました。サーカスの象は自分の演技が終わり、次の出番を待つ間、いつも地面のちっぽけな杭（くい）に足をつながれています。その杭というのは、地面にいくらか打ち込まれていない小さな木のかけらです。象ほどの力を持った動物なら、杭を引っっこ抜いて逃げるのが簡単そうに思われるけれども逃げません。「どうして逃げないんだろう？」このような疑問を抱きます。そして、主人公は、周りの大人たちに疑問の回答を求めましたが、誰も納得のいく答えを返してくれる人はいませんでした。その後何年も経って、納得のいく答を返してくれる人に出会います。その回答はこうでした。「サーカスの象が逃げないのは、とっても小さいときから同じような杭につながれているからだ」

主人公は、この話を聞いて次のように理解しました。「生まれたばかりのか弱い象が杭につながれている。そして、そのとき象は、押したり、引いたり、汗だくになって逃げようとしたに違いない。でも努力の甲斐なく逃げることはできなかった。小さな象にとって、杭はあまりに大きすぎたのだ。次の日もまた逃げようと頑張る、次の日も、……。そして、ついにある日、逃げるのができないと思い込んでしまった。それからは、決して自分の力を試そうとしなくなったのだ。」

私も含めて皆さん、この象のように思い込んであきらめていることはありませんか。遠い過去、数回だけ、試してみてできなかった。ただそれだけで、私たちは山ほどのことを“できない”とあきらめていませんか。努力を積み重ね、自分の力がついたとき、再度“できなかった”ことにチャレンジしてみてもどうでしょうか。できなかったことができるようになることもきっとあるはずです。「思い込み」や「先入観」などにとらわれて、自分の可能性を狭めてしまうのは残念なことです。生徒たちは、毎日、学校や家庭、地域でたくさんのことを学んでいます。知識だけでなく、豊かな心を育んだり、体力をつけたりしています。知らず知らずのうちに力を付けて人間力が磨かれています。だから、今はできなくとも、豊かな学びを経て、できるようになることもたくさんあります。私たち教職員をはじめ、保護者の皆さんや地域の皆さんが、子どもの可能性を信じて、寄り添い続けることが大切だと思います。その温かい支えの中でこそ、子どもたちは、以前できなかったことに再度チャレンジするようになります。失敗をおそれず、失敗しても挫折せず、自分の可能性を広げる生き方をしていくようになると思います。